

(エ) 論文要旨

論文要旨
申請者氏名 久保 正敏
申請学位 論文博士
主論文題目
ソ連海軍の外洋進出とその運用思想に関する一考察
-ソ連海軍戦略の形成過程とその特質-
主論文要旨〔邦文は4,000字以内 外国語は2,000語以内〕
1 研究の背景
陸上における権力支配は、まさにその地を直接に、政治的または軍事的に
占領・占有することである。しかし、海上における権力、すなわち「海上権力
(sea power)」は、時代とともにその目的を変化させてきた。
アメリカの政治学者モデルスキーは、20世紀のアメリカなどがこれまで覇
権を持った世界大国であるとしている。そしてこれらの世界大国の共通事項
として、強大な海軍を、世界に影響を及ぼすための戦略的組織として位置づ
けている。
それは、海上権力を確立させるための組織であり、その存在は単に軍事的
なものにとどまらず、外交的性格のものから極めて軍事的性格の強いものま
であり、その目的において柔軟に使用することができる。そして陸軍や空軍
と違い、その行動は極めて政治的な意味合いが強い。このため海軍は、戦略
的組織として位置づけられた。

2 研究目的

本論文の目的は、通常戦力や核戦力によって米ソが睨みあっていた冷戦構造のなか、ソ連の海軍戦略がどのように形成され、ソ連という国家における役割の本質を論述することである。ソ連という国家が歴史上に存在したのはわずか70年余りであった。すなわちソ連海軍は、歴史上初めて社会主義を標榜した「ソ連」という国家の海軍であった。その社会主義国家ソ連の海軍戦略はいかなる形成過程によったのか、そしてその特質はいかなるものであるかについて論述した。本論文の学術的価値は、冷戦期2大超大国として存在したソ連の海軍戦略について社会主義国ソ連の側から分析・検討して評価した点にあると考える。

3 研究方法

全体的に用いた基本的方法は帰納法であり、ソ連海軍戦略の変遷についての歴史的考察とソ連海軍の機能分析を行なった。そして、道筋を立て、合理的に判断できるように、次に示す4つの設定目標に対して検討を行ない、その結論から総合的に評価を導き出した。

- (1) ソ連の軍事戦略の基本となる概念はどのようなものか。
- (2) ソ連海軍戦略の変遷とその変遷に識別し得るパターンとスタイルがあるのか。あるとすればその因子はどのようなものであったのか。
- (3) 「ゴルシコフの海軍」における外洋派遣兵力の本質とは何か。そしてその役割とは何であったのか。また、ソ連の海軍戦略に航空母艦の保有が必要であったのか。
- (4) M. S. ゴルバチョフ書記長が登場して間もなく、海軍総司令官が S. G. ゴルシコフ・ソ連邦海軍元帥から V. N. チェルナビン海軍元帥に交代した。いわばポスト・ゴルシコフであるこの期に、海軍戦略にどのような変化が見られたのであろうか。米ソの軍備管理と信頼醸成を基本軸としてその本質を検討

する。

4 本研究のオリジナリティ

本論文のオリジナリティの一つは、設定目標 4 である。つまりゴルバチョフが登場したことによるソ連海軍戦略の変化の本質を考察することである。

ソ連の海軍戦略の発展は、外交における発展との関係であった。一つの例はデタントと第三世界との関連である。設定目標 3 にも関連するが、相互確証破壊の関係は、結果的には相互平和共存の関係をつくり出した。しかしそれは、米ソに直接関係ない地域、すなわち第三世界においては権力の真空地帯を生み出すことになった。その結果ソ連海軍の外洋進出がはじまり、ゴルシコフの海軍といえた。

しかし、ポスト・ゴルシコフ期において、ソ連海軍はそれまでの外洋での行動を転換させ、その活動は低調になっていった。このような変化はどのような説明ができ、理論的な帰結ができるのか。またその要因は何であったのか、軍備管理を一つの論点として論述した。

5 論文構成

(1) 第 1 章

ソ連という国家が現在は存在していないため、地理的概要、歴史的概要、政治的概要を述べた。また、社会主義国家における基本的な軍事戦略の概念について検討した。

(2) 第 2 章

ソ連海軍戦略に影響を与えた戦略理論について述べている。特にクラウゼヴィッツやジョミニの「力の理論」、コーベットの「限定的制海論」はソ連海軍戦略に大きく影響を与えている。そして、ソ連海軍戦略の根底にあるものは「要塞艦隊戦略」であると考えることができる。

しかし、ソ連海軍が領土防衛を強く意識していること、また軍事理論につ

いても独自の考えを持ちながら、党指導部や地上軍指導部から大きな制約を受けていた事実が存在している。

(3) 第3章

ソ連海軍の各種任務と能力の機能分析を行なった。本章において最終的にゴルシコフ元帥の海軍戦略について評価した。その内容は「フリート・イン・ビーイングの前進配備」というべきものであり。航空母艦を保有しないソ連海軍が、デタント期間中、外洋において核戦力を背景にプレゼンスを維持したということがいえる。

(4) 第4章

外洋海軍の必要十分条件と航空母艦の保有について検証した。本章では、外洋で行動する際には、同盟国ともいえる海外の基地が必要であることを検証した。この点については結論における海洋国家と大陸国家の国益と安全保障の非対称性につながるものとして重要な点であると考えている。

また、著名なソ連海軍の研究家ノーマン・ポルマー博士も、ソ連海軍が空母を保有しなかった点について疑問を呈している。ソ連海軍が航空母艦を保有しなかった点は、大きく2つの理由によるものであり、1つは、航空母艦が攻撃的な艦種であるということ、そしてもう1つは経済と技術的な問題であるということがいえる。これらのことから、本論文においては、ソ連海軍を「外洋海軍」とは表記せず、「外洋派遣兵力」として表記している。

(5) 第5章

ポスト・ゴルシコフ期における海軍戦略の変化について検討した。本論文の中心となるべき部分である。すなわち、ポスト・ゴルシコフ期、つまりゴルバチョフの時代における海軍戦略の変化について、軍備管理を中心にして分析・検討した。

(6) 第6章

総合的結論として、設定目標 1～4 の結論から総合的結論を検討した。試問の結論は次のとおりである。

ア 設定目標 1

ソ連の軍事戦略の基本的な概念は「軍事力の優越」といえる。

イ 設定目標 2

ソ連海軍戦略の基本的な因子は「要塞艦隊戦略」、識別し得るパターンは「国家威信の誇示」と「祖国防衛たる抑止力」、その戦術的様式（スタイル）は「積極的防衛作戦」と見ることができる。

ウ 設定目標 3

すなわち、ゴルシコフの海軍における海軍の本質は、「戦略攻撃」であり、そしてそれは、ソ連の「国家威信の誇示」としての役割を果たした。また、そのようなプレゼンスの維持には空母の保有よりも海外基地または同盟国が必要であった。

エ 設定目標 4

ゴルバチョフは「軍内ペレストロイカ」によって、陸海軍とも積極防衛作戦を実施できる軍事力整備を実施しようとしていた。そしてそれは海軍を外洋に展開させる「フリート・イン・ビーイングの前進配備」から再び、ソ連沿岸の「要塞艦隊戦略」に戻すことを意味しており、それは米ソの海軍軍縮につながっていった。

オ 総合的結論

以上の設定目標 1～4 の結論から、大きく次の 2 点をソ連海軍戦略の特質として述べた。

①海軍国家と陸軍国家の国益と安全保障の非対称性としての緊急増援などの相違があること。

②海洋国家には海外基地または同盟国が必要であること。